

第3回 武蔵野市文化振興基本方針策定委員会 議事要録

○日時	平成29年9月25日（月） 午後7時～9時
○場所	かたらいの道市民スペース
○出席委員	◎小林真理、若林朋子、小川希、木本幸恵、○酒井陽子、高萩宏、青木稔、富島佐紀、花田吉隆（◎委員長 ○副委員長）
○傍聴者	3名
○事務局	市民部市民活動推進課長 教育部長、教育部生涯学習スポーツ課長、（公財）文化事業団常務理事、吉祥寺美術館館長 他

議事

(1) 第1回・第2回委員会の主な意見

事務局より9月16日に実施したワークショップについて説明を行った。その後、資料2「第1・2回策定委員会 主な意見」により、第1・第2回策定委員会における意見について事務局が説明を行った。

(2) 「文化に関する施策の方向性やあり方」について

資料3「文化に関する施策の方向性やあり方」により、今回の議事の流れと4つのカテゴリーについて委員長が説明を行った。（議事（2）では、各委員がカテゴリーごとにポストイットにキーワードを書き出し、それをホワイトボードに貼りながら議論を進めた。）

A. あらゆる市民に対する市内での鑑賞・体験の機会について

【委員長】 「あらゆる市民に対する市内での鑑賞・体験の機会」について意見をいただきたい。

【委員】 基本的な理念として、文化を考えるときには市民一人ひとりが輝くべきということを根本に据えるべきだ。市民一人ひとりが輝いてこそ、武蔵野市が輝く。そのためには、特定の人だけでなく、市民一人ひとりが恩恵を受けべきだと思う。高齢者、障害者、子どもも、もれなく恩恵を受けることを念頭に置くべきだ。このことを基本計画の理念の部分に是非明記してもらいたい。

次に、行政はこれまで画一的なサービスを提供してきたと思う。これまではそれでよかったが、ニーズは多様化しているし、人生100年といわれるように高齢者も元気になってきた。働く女性も多い。そのなかで今後行政が行うべきことは、市民が集まる場をつくることになると思う。その場に集まった市民が自発的に文化をつくるという考え方で、行政は「場を準備する」という側面支援をすればよい。武蔵野プレイスはそのような場になっ

ていると思うが、文化についてもあのような場があるとよい。市民が集まり、相互作用を生み出しながら、まちに文化的な香りができていると素晴らしいと思う。

【委員】 鑑賞・体験の機会は充実していると思う。市民が与えられることは十分なので、そうではないことを増やしていくための話し合いができるとよい。だから、A以外の論点に関する取組が増えるとよいと思う。体験のあり方については、自分たちで自由に活動できることを重視して、体験の場をつくってもらいたい。

【副委員長】 あらゆる市民にとって鑑賞・体験の機会をつくろうとするなら、無料ないしは安価で鑑賞・体験ができることが必要だと思う。高齢者や障害者だけでなく、その人たちの介護・介助をしている人への補助についても考えたい。仕事をしながら子育てや介護をしている人たちも夜のコンサートに参加するのは難しい。アクセスしやすいコミュニティセンターの活用も考えられるとよいのではないか。

【委員長】 武蔵野市のコミュニティセンターは住民自治で運営されているが、いまの意見ではもっと文化的な事業をやらせてもらう必要が出てくる。どのようにすればよいか。

【副委員長】 住民自治といっても基本的には市が所管する施設だ。市が運営組織に文化事業を行うように打診してみてもどうか。

【委員】 「あらゆる市民」は具体的にどのような層になるのだろうか。市民文化会館の観客は固定化されているように思う。その事実を踏まえると、あらゆる市民に貢献できているのだろうかと自問することがある。どうすればあらゆる市民に届くのか、そのことを考えないといけないと思っている。

【委員】 「あらゆる市民」といっても、おそらく全市民が公演を観ることは難しいだろう。そもそも全市民が文化を必要としているのか。「武蔵野市にとって文化が必要なのか」という問いから考えないといけない。自分はアートセンターを運営しているが、誰もが文化を求めているという実感はない。ただ、まちにとっては必要だと思っている。

一方、住民の側では文化を自分事だと思っている人は少ないのではないか。そのような人たちが文化の必要性について考えるための入り口をつくる必要があると思う。「武蔵野市にとって文化が必要なのか」ということを継続的に考える機会をつくり、議論を公開していくことで市民にも考えてもらうようにしていくことが大切なのではないか。

【委員長】 同感だ。市民文化会館の改修がきっかけではあったが、残念だった。改修工事に意見された方は本当に文化や市民文化会館に関心を持っている人かどうか分からない。

- 【委員】 このカテゴリーは、そもそも何を鑑賞・体験させようというのか。それを明確にする必要はあると思う。また、「あらゆる市民」といっても、対象を具体的にイメージする必要があるはずだ。行政としてはあまねく人たちをフォローする必要があると思うが、ある時期はこの対象に注力する、という手法があってもよいと思う。それが武蔵野市の特徴にもなる。
- 「鑑賞・体験」という言葉は、受け身であり主体的な活動は該当しないように思う。「提案」や「発表」という活動もあるはずで、市民のアクションが生まれるような機会をつくるのもよいのではないか。
- それと、方針全体に関わることだが、現状に対して、「いつまでに」「どのように」していきたいのかということイメージできるとよい。具体的なアクションについても話せるとよい。
- 【委員長】 方針において、どこまで具体的に示していくのかということも話すべきだとは思う。方向性を示して10年間でそれに沿って事業をやっていくのか、具体的な期限を定めて事業計画を示して実行していくのか。その点が明確ではないことは気になっている。
- 【委員】 鑑賞事業の客層を広げようとするのであれば、客層にあわせて料金体系を柔軟にすればよいのではないか。収益構造とも関係することなので、事業を継続していくという観点では難しいとは思いますが、客層を広げるという点ではポイントとなるのではないか。
- 【委員長】 文化事業団の経営面にかかわる話だと思う。指摘いただいた難しさの解決方法としては、武蔵野市の交付金と事業収入以外のところから資金調達することだと思う。

B. 参加型の体験・創造の機会について

- 【委員長】 次に「参加型の体験・創造の機会」について意見をいただきたい。
- 【委員】 子どものために市の文化事業の情報を気にするようになったが、それ以前は気にもしてなかった。本当に必要としている人はどのような人たちで、どれぐらいいるのか。そのことを考えた方がよいのではないか。
- そして、必要としている人が集える場をつくることで、コミュニティをつくったり、広げたりしながら文化が盛り上がっていくと、文化を感じられる人が増えると思う。機会を与えるのではなく、何かを自分でやれる場があることが重要だと思う。
- 【委員長】 そのような場について具体的なイメージはあるか。
- 【委員】 ワークショップは楽しいけれども、「楽しかった」で終わってしまって、その後につながらない。ファブラボのように自分で工作ができるスペースが増えていくと聞くが、文化やアートでもあったらよいと思う。武蔵野プレ

イスのなかに工作室のようなスペースがあったが、一人でフラッと行って使うことはできない。行きたいときに行けて、やりたいことが自由にできる場所があるといい。そのような場で若いアーティストを育てることも考えられるとよいし、そこで子どもとアーティストが交流すれば、お互いに刺激を受けたりするだろう。そういう場所がとにかく欲しいという思いがある。

【委員長】 よくわかる。戦後、社会教育施設として建設されてきた施設はそういうものだったのだと思う。そこで何かができるという可能性が開かれていたのだろう。ただ、現在では求められる施設が変わってきている。その変化に公共施設がついてこられなくなっているのだろう。

【委員】 鑑賞、参加、創造発信はそれぞれ別の事業だと思う。鑑賞型は関心のない人に見せてもどうかという話だが、参加型は色々な人たちが関わる方がよいと思う。一方、創造発信型はむしろプロフェッショナルな人が対象となると思う。3つに分けないと話が混乱すると思う。

【委員長】 その分け方でいうと、いまのカテゴリーは参加型だと思う。

【委員】 小樽のどこかの商店街が、オルガンをまちなかのスペースに設置し、自由に弾けるようにしたところ、多くの人がオルガンを弾きに訪れるようになったらしい。それを街ゆく人が取り囲み人の輪ができた。演奏する人と鑑賞する人のコミュニティが生まれたと聞いており、よいモデルだと思った。場所があり、文化を生み出すものがある。そして人が集まり、その中から自然と文化が生まれていく。文化とは人の集いの中で自然に生まれ育まれていくもの。「人の輪」ができて、「コミュニティ」が生まれなければならない。行政は、そのための「場」を作る。あとは、市民に任せる。時間はかかるが、そうやって少しずつ発酵してできていくのが文化でないか。小樽のモデルは参考にしてみたい。

【副委員長】 前々回の委員会で、学校では子どもが受け身になっているという意見があったが、学校でこそ体験的な取組を行えるとよいと思う。

武蔵野プレイスのスペースが自由に使えないという意見があったが、ハードがそろっていても、有効活用するための知識を持つスタッフが配置されていないといけない。子どもが飽きずに取り組むためにも、専門のスタッフがサポートしていけるとよいと思う。

「武蔵野市にとって文化が必要なのか」という問いかけは、遠回りのようであるが、市民とアーティストや市民同士などで話し合いを重ねていくことで、無意識に触れていた人たちが改めて文化を自覚するように思う。文化を創造する前に、必要性について話し合う場を設けた方がよいと思う。

【委員長】 本質的なところに立ち戻っているように感じる。

- 【委員】 「参加」とは何か。受け身かもしれないが、享受することも参加ではないかと思う。鑑賞と参加は線を引けないのではないか。また、創造も、専門家の技能に閉じてしまうのではなく、何かに触れた感動を共有することも含めてもよいのではないか。それを創造と考えられると、すべての人に関わることとしてとらえられるのではないか。
- 【委員】 現状の市の事業をみると、武蔵野市が力を入れた方がよいのは創造の機会をつくることだと思う。その前提として、公が機会をつくるのが想定されていると思うが、むしろ市民が企画提案する機会も増やしていけると思う。その方が、市民が本当に参加したいと思う機会がつけられるのではないか。市民による創造の機会をつくる目的は、個人的な文化体験にとどまらない、武蔵野市のまちづくりやコミュニティづくりにつながることも期待できるからである。
- 【委員】 体験・創造の機会というとワークショップが取り上げられる。美術館でも教育施設でもワークショップが必ず実施されるようになっているが、すでに形骸化しているようにも思っている。クオリティコントロールが甘くなっているからだ。参加型であればよいわけではなく、クオリティの高いワークショップを提供すべきだ。数多く開催できなくなり、参加者も限られるかもしれないが、参加した人たちがその体験を共有していけば、市外にも武蔵野市の取組が伝わっていくだろう。ただ、そのためには、行政がワークショップのクオリティを測る尺度を持っていないといけないと思う。
- 【委員長】 ワークショップやアウトリーチは、創造のプロセスを体験する機会を目指してきたが、実態は玉石混交だ。クオリティの高いものを体験できた人はよいが、低いものを体験した人はそれ以上のものを求められない。正直、入口を体験するだけのものが多く、体験の次の展開をつくれていない場合が多い。
- 【委員】 参加型といったときに、団体に所属しないと、その場に参加できないケースがあるように思う。団体に属さなくても、個人が発表できる機会がたくさんあるとよいと思う。そのような参加の機会を行政がつくるとよいと思う。参加型とは団体の参加だけでなく、「個人の参加型」もあるということ。参加型の文化を考えるとこの点を考えないと、参加しようと思う個人の前に壁が立ちほだかることになり、折角の参加型文化行事が十分効果を上げられないということにもなりかねない。この点は、今後この会合で参加型を議論していくときのひとつの論点に据えてもらいたい。
- 【委員長】 既存の団体と行政が近くなりすぎた事実もあると思う。伝統芸能などは流派に属さなければ体験もできないが、その前の段階をつくっていく方がよ

いという意見だと理解した。

C. 文化の担い手の育成や多様な主体との連携について

【委員長】 次に「文化の担い手の育成や多様な主体との連携」について意見をいただきたい。

【副委員長】 文化の担い手の育成というと、市内商店街の空き店舗をギャラリーに武蔵野美術大学の学生が作品を制作し、展示するという取組があったと記憶している。近所の小学生が、学生が制作している様子を見に集まっていたが、文化・芸術の制作現場を直接見ることは、子どもにとっても有益だろうと思った。障害者関係では、デンマークで工房の親方と障害者が一緒にものづくりを体験する取組をしている。武蔵野市に工房があるか分からないが、そのような取組ができると非常におもしろいと思う。

若手アーティストの育成という話もあったが、行政が育てるとなると税金を使うので、市民の了解を得ることが必要になる。市民が「この人を応援したい」という思いを持たないと難しいだろう。

【委員】 行政が自ら何かをやるのではなく、地域の団体に向けて、武蔵野市が文化を盛り上げたいと宣言してしまってもよいのかもしれない。アイデアやノウハウを持っている団体は勝手にやってくれるだろうから、行政はそれを応援するとよい。その流れができてしまえば、色々な出来事が自発的に起きていくのではないか。場所とコミュニティがあれば自発的に創造していけると思うので、やはり場所があるとよい。

【委員長】 場所についてだが、具体的なイメージはあるか。武蔵野プレイスの文化版を新たにつくるのか、それとも空き家を活用するのか。

【委員】 どちらでもよいと思うが、とにかく近所にあってほしい。身近にあることが大切だと思う。

【委員】 多様な主体との連携というとき、NPOなどが連携先として想定されているのかもしれないが、行政だけが連携したいと思っているかもしれない。一方的な思いで終わらないように、連携先となる団体の意見やニーズも聞いた上で検討した方がよいと思う。

【委員】 行政が担い手を育成しようとするすると予算がかかるため、他の施策とトレードオフをしなければいけない。具体的に取り組んでいく方法を考えないといけないと思う。また、行政が担い手育成に関わろうとしたときに、本来文化が持つ自由さが損なわれるのではないかと気になるところもある。堅苦しいものにならないようにしなければいけない。

連携については、行政が一方的に連携を押し付けたり、民間に依存してしまうのではなく、おたがいに価値を高め合うような連携のあり方を考えな

いといけないと思う。

【委員】 文化の担い手育成は行政ではできないと思う。誰を育成するのも選ぶことができないと思う。行政だけが抱え込まずに、行政の外側で担っていくこともできるのではないか。

【委員長】 次回の委員会では文化振興の主体の役割について話すことになっている。行政とそれ以外との役割分担についても議論していきたい。これまでの意見は総じて、行政が直接やらずに、任せていってもよいという意見だと理解している。

【委員】 連携にあたっては、行政のメリットやニーズばかりを主張するのではなく、相手のニーズを聞く必要がある。連携先は色々あるが、武蔵野市は大学に注目するとよいと思う。

担い手育成については、育成する対象はアーティストとマネジメントができる人材の2種類が挙げられるが、どちらかというとなマネジメント、プロデュースができる人材を育てる方がよい。新しいアーティストを発掘・育成できる人が市内に根付けば、新しいアーティストも育つことになる。ただ、そのための人材育成の機会が現状は少ない。

【委員長】 いまの意見には賛成だ。武蔵野市には何かをやりたいと思っている人、さらに何かをできる人は多い。そういう人は市外で活動していることが多いが、そのような人とつながって、市内でアクションすることをおもしろいと思ってもらえると思う。行政の外側で、そのようなマネジメント的な動きができる人がいれば活性化していくだろう。

D. 新しい文化の創造・発信について

【委員長】 最後に「新しい文化の創造・発信」について意見をいただきたい。

【副委員長】 「新しい文化」という言葉から、「古い文化」とは何かと気になった。まちづくりは、インフラをつくっていた第1世代の活動が終わって、いまはそれをどう活用するのかという動きが見られる。ちょうど30～40歳代ぐらいのマンション住まいの人たちが、まちづくり活動や防災活動を通してまちに馴染んできていると思う。そのような活動が文化になっていくとおもしろい。クリーンセンターでもアーティストを呼んで事業実施しているが、全く別、無関係と思われるところから文化が生まれるのではないか。あと、身近に文化に触れられる場所があるとよいという意見があったが、市内に自転車専用道路があればアクセスがしやすくなるのではないか。

【委員】 文化は、昔からあるものだと思うからこそ大切にされるのかなと思う。ただ、武蔵野市には伝統的な文化がないから、何をすればよいか困るのかもしれない。カテゴリーは新しい文化に関するものだが、古いものを応援す

る方向があってもよいと思う。老舗のお店は、伝統文化ではないにしても、文化だと思える人が多いと思う。そのようなお店が存続できるように支援したり、古い建物を残すことも文化を発信することになるのではないかな。

【委員】 このカテゴリーの前提となる項目では「市独自の文化」という言葉が使われており、その方がよいと思う。中野区はアニメ、立川市は大型店が立地してまちづくりがされており、吉祥寺よりも魅力的になってきているのではないかな。一方、吉祥寺はチェーン店が増えており、武蔵野市らしさ、吉祥寺らしさがなくなってきている。だから独自のものをつくっていかねければいけないという論調になるのだと思う。

文化の創造を行政の外側に任せるのはよいと思うが、武蔵野市として収穫すべき価値を設定すべきだ。その設定に際しては、行政だけでなく、民間や商店街などと協議して、何を中核に据えるかを議論すべきだと思う。その価値を少しずつ高めていけばよいのだと思う。

【委員長】 何を中核にするべきだと思うか。

【委員】 自分には何かは分からないが、民間や商店街なども合意できるものである必要がある。

【委員】 新しさについて考えていたが、固有の古いものも独自性がある。そういったものを大切にしていけば、まちの雰囲気は文化的になり、それが刺激となって文化が自ずと生まれてくるのではないかな。立川市は駅北口の再開発でファール立川を建設し、パブリックアートに力を入れた。そのような雰囲気づくりをしてきたのだろう。武蔵野市も、市民が文化的に触発される雰囲気をつくるとよいと思う。それが発信の源になるだろう。

【委員長】 何かあればそれを使えばよいし、何もなければ、ないしはなくなってしまえば新しくつくるしかない。どのような時間軸で考えるかにもよるが、100年間、続ける気概を持てるかどうかではないかな。すぐに実感できなくても、将来世代が実感することもある。

【委員】 新しい文化の創造こそ民間に任せる方がよいと思う。行政は「新しい文化」を設定できない。行政や一般の人々の想像をはるかに超えるようなものでないと新たな文化としてのインパクトは持ちえない。そうしたことができるのがアーティストであり、アートをマネジメント、プロデュースする人材。行政ができることは、そのような新しくインパクトのあるものが生まれる土壌づくりであり、そうした活動の支援だろう。

同時に、新しい文化の創造は覚悟が必要だ。新しい文化は、美しく気持ちよいものばかりではないはずだ。それも含めて新しい文化だと覚悟を決めることが必要だ。

【委員】 やはり何かひとつ議題をつくり、みんなで話し合っていく必要があると思

う。たとえば、オリンピック・パラリンピックの翌年2021年に市がアートセンターをつくるという前提で、どのような場であればよいかというような議題だ。オリンピック・パラリンピックの翌年というインパクトも手伝って、議論が生まれるのではないか。

- 【委員長】** 個人的には賛成する。最後に、遅れて参加した委員からも意見を聞きたい。
- 【委員】** いまの категорияについては、市民が文化を必要としているかどうかは把握した方がよいと思うが、文化一般を提供するのではなく、武蔵野らしさがないといけない。武蔵野市民は市内で鑑賞や活動をする必要がないので、武蔵野市らしさをつくり、行政として提供していかないといけない。武蔵野市らしさを難しくしているのは、市民文化会館がクラシックの公演を積極的に打っていくという事業モデルがうまくいったからかもしれない。当時はそれが武蔵野らしさだったのかもしれないが、現在ではそのように評価されなくなっているのかもしれない。
- またそもそも武蔵野市は3つの駅があり、中心となる拠点エリアがない。住民はそれぞれのエリアにアイデンティティがあるせいで、地理的にも武蔵野らしさが出しにくいかもしれない。ただ、だから、文化において武蔵野市らしさをアイデンティティとして形成していくことが求められていると思う。
- 「参加型の体験・創造の機会」については、市に関係するアーティストと一緒にやればよいと思う。クオリティの低い参加型の事業はやらない方がよいが、武蔵野市とかかわりのある人でクオリティの高い事業をできる人はいるだろう。
- 「文化の担い手の育成や多様な主体との連携」については、文化芸術関係はアクセシビリティに関する議論が広がっており、障害者の芸術活動推進法案も提案されているので、福祉団体とも連携してアクセシビリティに取り組んではどうか。
- 【副委員長】** 武蔵野市には知的障害児の教育に力を入れている学校があり、全国から子どもが集まっている。一方、身体障害者に対する施策は十分ではないと感じている。
- 【委員】** 同時代の文化に取り組んでいくことも必要だと思う。可能性を感じるのは井の頭公園なので、その周辺に拠点をつくってもよいかもしれない。井の頭公園文化をつくってみてもよいのではないか。
- 【委員】** 自分としては「文化の担い手の育成や多様な主体との連携」というカテゴリーが重要になっていくと考えている。市民やNPO、作家・アーティストなど、いろいろ担い手が出てきたが、そこでの連携が重要だと思う。行政だけでは難しいと思うし、つまらないと思う。創造の機会や場づくりの

ノウハウは、行政の外側にあると思うので、それを活かさないといけないと思う。市内の担い手についてリサーチしてはどうか。

【委員長】 文化事業団の事業には特徴がある。小ホールの規模を活かして、他では招聘しないような若い演奏家の公演を打ってきたことはすごいことだと思う。新しい作家や作品を事業として打ち出すことは土壌といえるのではないか。それを武蔵野市らしさと考えてもよいと思う。

【委員】 吉祥寺シアターも独自性のある事業をやっており、それも武蔵野市らしさだと思う。武蔵野プレイスも独自の施設だと思うが、それも武蔵野市らしさだと思う。一体化すると武蔵野市らしさは出てくるのだろうと期待しているところはある。

2 事務連絡

(次回日程について)

第4回 10月27日(金) 19時～ @武蔵野公会堂第1・2会議室

3 閉会